金髪考古学者の隣人

吊人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

金髪＋考古学者＋ポケモン＝シロナ様

シロナ様の隣人である主人公のお話

注意

タグにもある通り処女作です。拙い所しかありません。

シロナ様が好きなので書きました

追記

最近、どう考えてもタイトル詐欺だと気づきましたがタイトルはそのまま行こうと思います。

さらに追記

必須タグに神様転生と転生、憑依があるのですが、ネタバレを考慮して全てつけておく事にします。その時がくればいらないタグを外します。

目次

隣人のプロローグ ―― 1
隣人のプロローグ　その2 ―― 6
隣人の相棒 ―― 9
隣人の引っ越し ―― 15
隣人と憧れの人 ―― 20
隣人の学校／隣人の救助 ―― 23
隣人達の傍観者 ―― 30
隣人の卒業 ―― 37
隣人と博士 ―― 41
隣人の危機 ―― 49
隣人の初挑戦 ―― 55
隣人と花の町 ―― 63
隣人と森の洋館（上） ―― 70
隣人と森の洋館（下） ―― 80
隣人と将来の夢 ―― 87
コラボ回　隣人とガチャ ―― 99

隣人のプロローグ

日本の皆さん（読者の）こんにちは。いかがお過ごしだろうか。俺は部屋でポケモン達とテレビなんかを見て楽しんでいる。そう、ポケモンとだ。本来なら驚く所なんだろうけどもう慣れた。学校だって職場だって最初は新鮮でもすぐ慣れるだろ？それと一緒だ。

さて、これだけでもう察しのいい人はわかると思うが俺はこの世界、『ポケットモンスター』の世界の人間ではない。前世ーーー転生なのか憑依なのかは分からないが前居た世界での人生を前世とするーーーは普通の男子高校生だったし、某ツンツン頭の主人公みたいに不幸だった訳でもない。ポケモンもテンプレのパーティーなんかをネットで調べて作るくらいで、別に廃人って程でもなかった。

この世界に来てもう何年も経っているが、今は少し前まで旅に出ていたから休養として自分の家に居る。お隣さんとは結構仲もよく、家にいる時はたまに一緒に呑んだりする程の仲だ。と言っても、ただ隣人なだけじゃなく小さかった頃（この世界での幼少期）からの付き合いだから、いわゆる『幼馴染』ってやつでもある。

さて、前置きが長くなったが俺が言いたい事は一つ

「ねえ、一緒に呑まない？」

ウチのお隣さん（シロナさん）は可愛いって事だ。

――――――――――――――――――――

　最初にこの世界で目覚めた時はそれはそれは驚いたね。うん。だって寝て起きたら知らない天井だぜ？今となっては「知らない天井だ」なんて言っておけば良かったなと思うがその時は「は？え？………………え？」って混乱してたな…

　数十分…いや、一時間位は掛かったかな？落ち着いてなんの世界か確認、なんてテンプレ通りのイベントをこなした後主人公（その他転生者、憑依者等）が思う事なんて一緒だろう。

「俺ＴＵＥＥＥＥ（無双）したい」　「ハーレム作りたい」　「好きな原作キャラを愛でたい（恋愛関係になりたい）」

　まあ殺伐とした世界だったり生き辛い世界なら原作に関わりたくない主人公もいるらしいが…まあ大体はこうだ。

かく言う俺もその一人。とりあえず自分が転生したと考えて特典……まあよくあるチート能力が無いかどうか色々試してみた。

無い。

ハハッ…ワロス…いやワロえない。

あったのは言語の翻訳能力（アニポケを見ればわかるが、ポケモン世界の文字は少なくとも元の世界にはない）と地味に使えそうな『補正』能力だ。いや、地味なんてもんじゃないな。わかり辛いだけで滅茶苦茶使える。効果はアニポケみたいな事になる…じゃあ全然伝わらないよな…例えばサトシはリザードンの火炎放射を受けても黒焦げになる程度（程度と言っていいかは分からないが）で済み、しかも直ぐに回復するだろ？アレと同じ事が起こるんだ。つまり、何でも溶かす炎（4215℃の炎）を喰らってもその程度で済むと言う事だ。ついでにヒポポタス（49.5kg）を頭に乗せて行動するなんてことも可能になる。

だが考えて欲しい。『逆にこれがなかったら？』例えばゴースを捕まえて一緒に遊ぶとする。どうなると思う？インド象でも二秒で倒れるガスを吸って人間が無事でいられると思うか？俺は思わないね。

とにかく、特典はこの世界で生きていく上で必要最低限の物しか無いと分かった。それなら次はと知識チートで俺ＴＵＥＥＥの道を考えた。そもそもよく考えてみればポケモン世界へ転生する系の小説でも特典は殆どみないし、何よりよくある王の財宝やつとか…

いや、この宝具は万能すぎるから別として他の『成長（自分）チート』とか貰ってもポケモン同士を戦わせるこの世界では意味ない事に気付いた。

知識チートが通用しそうか色々調べてみた。

結論から言うと確かに使えるがチートって程ではなかった。どうやらこの世界はアニポケ寄りの様だ。つまり最強技の『避けろ！』が使えたり、特性『根性』ではない根性によってトンデモパワーを発揮するらしい。でもゲームの知識が役に立たない訳でもない。ポケモンのタイプ、特性、技、特徴、後は道具とかの知識が有ると無いでは大違いだ。

さて、転生（と言う事にしておく）した俺の状態だが今は5歳で性別は前世と変わらず男のまま、そしてイッシュ地方のソウリュウシティ（ホワイトｖｅｒ）に住んでいる様だ。今「カンナギじゃねえのかよ！」と思ったそこのアナタ、正論だ。タイトル詐欺にも程があるがもう暫く付き合って貰えると嬉しい。

タイトル詐欺ついでにお隣さんは市長、つまりシャガさんらしい。ちなみに某失敗ヒロイン（アイリス）はまだ産まれてない様だ。

閑話休題、ここから俺のチートと言うには程遠い『強くてニューゲーム』が始まる訳だ。何？前世の知識あるだけでチートだろ？そんな訳ないだろ。そりゃ勉強面なんかじゃ良い成績だろうがこちとらリアルポケモンについてはど素人だ。

…また話が逸れたが今の状況（最初の状況）になるまでの俺の冒険なんて物に興味が少しでもある様なら聞いて行ってくれ。

隣人のプロローグ　その2

読者日本の皆さんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやらポケモン世界に来てしまった様だ。

メタ的に言えば大まかな状況は前話で言っているから詳しい状況を説明しようか。

俺は普通に家で眠り、起きると知らない天井だった。多少一時間取り乱してしまったが、落ち着いてテレビをつけてニュースを見てみた。こういう時はとにかくなんの世界に来たかを確認するのがテンプレだからだ。前世で転生、憑依物の小説を読んでいてよかった。

テレビではトレンド通信なる番組が始まる所だった。

「それでは、相性チャンネルです。」

『相性』？イキナリ占いか？なんて思っていた時期がありました。

「ノーマルタイプには格闘タイプが抜群です。」

この世界がなんの世界なのかほぼ確信した。別のチャンネルに変えてみる。やはり予想が合っていた。

そこに映されていたのはーーーーーポケモンバトルだった。

「よっしゃぁぁ！」

夢にまで見た転生（としておく）、しかもポケモン世界。最高じゃないか！それに転生と言えばチート特典！こういう時は大抵頭の中に浮かんでくるか手紙的な物があるが…あった！机の上にまるでこれですよと言わんばかりの手紙が！興奮が抑えきれないままにその手紙を開く。

違うのかよ！どうやら普通の手紙だったみたいだ。でも、一つ特典がわかった。俺はその手紙を読めたんだ。アニポケの文字を読めたのだ。これは大きい。忘れていたがアニポケの文字は前世にはなかった文字だからな、この能力が無いと日常生活もままならないレベルだ。

さて、それ以外にも俺が今居る部屋を探してみたりしたが結果わかったのは俺の名前がハルトである事。今は５歳である事。そしてイッシュ地方のソウリュウシティ（ホワイトｖｅｒ）に住んでいる事。これ位だ。

「ハルトーご飯食べないのー？」

おっと、ご飯の時間の様だ。５歳児ならまだ流暢に喋ったらダメだよな。それなら…

「たべるー！」

…結構恥ずかしい。まあ５歳児だから授乳がないのが救いか。もし俺がやったら悶死しそう。

どうやら親は有名人とかじゃなく、前世と同じらしい。その分気が楽だったけど恥ずかしさも増し増しだよオイ…親の目の前で子供っぽく振る舞うとか滅茶苦茶恥ずかしいぞ。

それは閑話休題ともかくどうやらウチにもポケモンが居た様だ。イーブイ♀。可愛い。確かイーブイって♀の方が少なくなかったか？珍しいな。

やっぱ可愛いポケモンは画面越しよりリアルに触れ合う方がいいな！可愛いくて無害なポケモンは！

フラグになりそうで怖い。

さて、まだ考えたい事はあるが体が睡眠を欲している。今にも瞼が落ちそうだ。この先の方針は明日考えるとして、とりあえず今日の所は寝るとしよう。

隣人の相棒

日本(読者)のみなさんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら5歳にして相棒(パートナー)を選ぶらしい。

「ここに三匹のポケモンがおるじゃろ?」

その台詞はダメですよシャガさん!しかもその三匹って…

『モノズ』　『タツベイ』　『フカマル』

いやいやいや、シャガさんがドラゴン使いなのは知ってますけど流石にこの面子は…

「なんやこのｒｙ」

この世界に来て一ヶ月、そろそろ新しい暮らしや5歳児としての生活、前世(ポケモン)になかった物にも慣れてきた。

最近の趣味はジムに通う事。といっても、ポケモン世界だから体を鍛える方じゃなくポケモンバトルをする方のジムだ。ウチのお隣さんのシャガさんは市長であり、ソウ

リュウジムのジムリーダーでもある人だ。リアルシャガさんは普通にいいおじさんだった。そう、おじさんだったのだ。俺も最初は違和感があった。どうやら、原作よりも前の時代らしい。まだアイリスちゃんも居なかった。

それともう一つ。特典がまだある事に気がついた。

俺はジムにシャガさんと挑戦者のバトルを見に行っているのだが、バトルをしていない時はジムのポケモン達と遊んでいる。モノズ、フカマル、タツベイの三匹と遊ぶ事が多いが、その途中でタツベイを背負って走った事がある。タツベイをだ。その時は気づかなかったが、後でタツベイの体重を思い出してこの特典に気づいた。

その後も検証してみると、どうやらアニポケみたいな『補正』が掛かる事がわかった。重いポケモンも小さかったら肩に乗せられたり、ポケモンの技を喰らっても軽傷で済んだりそれも直ぐに治ったり。

この特典を『補正』と呼ぶ事にしたが、あってよかったなと思う。本当に…

ところで、今日はシャガさんに呼ばれてジムに来ている。なんでも大事な話があるらしい。

「こんにちはー」

「お、ハルト君よく来たね。」
シャガさんは俺の事を孫みたいに扱う。
例えば、お菓子をくれたりポケモンと遊ばせてくれたりする。チョロいおじいちゃんだ。さて、それで何の用だろう？
「ハルト君は『トレーナー資格』について知ってるかい？」
「なにそれ？」
え？何それ初めて聞いたんですけど。
「トレーナー資格はジムに挑戦したりポケモントレーナーの為の施設を使う為に必要な資格なんだ。」
「そしてそれは１０歳になって試験を受けて合格したら貰える物なんだ。」
成る程、そんな風になっていたのか。で、それが何に繋がるんだ？
「でも、それはあくまでトレーナーになる為の資格だから１０歳までポケモンを持ってはダメ、なんて決まりは無いんだ。」
へー。なんか段々想像が付いてきたぞ。
「そこでだ。ハルト君にポケモンをあげようと思う。勿論、ハルト君の両親にも話はつけてある。」
キタ━（。∀。）━！ポケモン、ゲットだぜ！

まさかこんなに早くポケモンが手に入るとは…それに博士から貰うだけじゃないんだな…

まあいいや。何のポケモンが貰えるんだろうか。

「ここに三匹のポケモンがおるじゃろ？」

その台詞はダメですよシャガさん！しかもその三匹って…

『モノズ』　『タツベイ』　『フカマル』

「なんやこのｒｙ」

「ん？どうかしたかい？」

「い、いや？なんでもないよ？」

あっぶね。思わず素が出てしまった。

それにしても『特殊』　『両刀』　『物理』それぞれの進化前とは…確かネット対戦でも使われてたやつらじゃないか。それにこいつらは何時も遊んでるやつらだし…

「うーん…どうしようかな…」

後の事を考えなければモノズ一択だ。みんな懐いてくれてるから選び難いんだがそれでも、それでもゲームでサザンドラに一目惚れしてしまったんだよなぁ…ゲーチス戦で登場したサザンドラを見た瞬間ビビッと来たんだ。まあ結局、その個体はサザンドラ（チート）に限り無く近い何かだった様だが。

（54レベ　64レベで進化）

次点でフカマル。前世ではお世話になったし何よりシロナ様の相棒でもあるポケモンだ。

三番目ではあるが、タツベイ。といっても、数字にしたら１０、９．５、９位の差だから悩む。両刀でサザンドラ・カイリューよりも速く、その上メガ進化すると物理受けにもなるポケモンだ。

モノズにするか。いや、ジヘッド(50レベ)を経てサザンドラ(64レベ)に至るまでが長すぎる。確かレベル進化で一番遅いんじゃなかったかな？

フカマル。バンギと合わせて砂パで活躍してくれたしな…

タツベイ。こいつは前世でも育てた事がないから育ててみるのもいいな…

よし、決めた！俺はーーーー

「このこをもらうよ。」

「よしわかった。じゃあ連れて帰るといい。」

「ありがとう！おじいちゃん！」

「ぐはっ」

吐血して倒れた。やっぱりチョロいおじいちゃんだぜ。

「これからよろしくな！モノズ！」エロゲ主人公

噛まれた。解せる。

隣人の引っ越し

日本(読者)のみなさんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら引っ越しするようだ。

「引っ越し？マジか。何処行くの？」
「いや…その…うん。」
「ちょっと待ってその言い方は凄い不安なんですけど。」

俺がモノズをパートナーにして3年。俺も8歳になった。飛び過ぎ？キニスンナ。
流石に3年も相棒(モノズ)と一緒にいるとどれ程のポテンシャルを秘めているかも分かってくる。
まず始めに、悪の波動を覚えている。これは確かタマゴ技の筈だ。この時点でシャガさん廃人疑惑が懸かるがまだいいだろう。次に、どうやら少しせっかちな性格をしてい

る様だ。これもいい。ポケモンによって性格は違うし、たまたまそれがゲームではS→B←だったとしても構わないだろう。たとえその進化前は物理主体のモノズ、ジヘッドだったとしても問題はないだろう。

一番の問題はここだ。6Vかもしれない。これによって上二つも大問題に発展する。これに気づいたのはジムの他のモノズ（一匹だけじゃなく、沢山居たから貰えた）と遊ばせている時だ。どうやら同じレベル帯のモノズの中で一番体力があり、力も強く、体も丈夫で悪の波動の威力も一番高く（全員使えた。シャガさん廃人疑惑濃厚）悪の波動を当てられても余裕があり、走った時一番スピードが速かった。

ここまでくればほぼ確定だろう。

シャガさんもトンでもない事をしてくれたもんだ。まあ厳選済みならそれはそれで嬉しいので貰っときますありがとうございます。

そしてついでに仲間がもう一匹増えた。ケーシィだ。コイツはいつだったかテレポートして来てそのままウチに居座っている。まあ捕まえてはないがトレーナー資格を取った後は直ぐに捕まえる予定だ。

さて、三年間の歴史を振り返りつつ現実逃避するのは止めよう。

ご都合主義展開

実は引っ越しすると昨日の晩教えられたのだ。その時の様子はこんな感じ。
「あ、そうだ。ハルトに言い忘れてた事があったわ。」
「え？」
「引っ越しするから。」
「引っ越し？マジか。何処行くの？」
「いや…その…うん。」
「ちょっと待ってその言い方は凄い不安なんですけど。」
「と、とにかく！早く準備して寝なさいよ。」
「その話題変換には無理があるでしょｗそれに早く寝ろって明日が引っ越しの日じゃあるまいしｗｗｗ」
「引っ越しは明日よ？」
「ファッ⁉？」

今思い返しても無茶苦茶な話だよオイ。勘弁してくれよマミー。
とにかく俺は引っ越しをするらしく、今はフキヨセシティで飛行機が離陸するのを待っている。
ちなみにシャガさんはお見送りに来てくれた。本当におじいちゃんみたいな人だ。

やっと着いた！と、言いたいところだけどどうやらまだ移動するらしい。ちなみに今はシンオウ地方のトバリシティらしい。らしい、ばっかりなのにも理由がある。原作よりも前なせいかギンガ団アジト、いや、建物の名前的にはギンガトバリビルか。が建ってないし、ゲームコーナーも無く、何より隕石がまだ降ってきてない様だ。

…これひょっとして隕石（デオキシス）降ってくる所見れるんじゃね？

まあそれは置いといて、そんな味気の無いトバリシティからさらに車で移動してやっと目的地に着いた様だ。

「んーーーー。」

ずっと座ってたから体が固まって…なんだここ空気美味いな。

なんていうかＴＨＥ・田舎の集落！って感じのこの街は空気が美味しい事が売りの街かな？なんて考えていたらもう荷物も引っ越し業者のゴーリキーが家に入れてくれたらしい。ポケモンのちからってすげー！

引っ越ししたからにはお隣さんに挨拶しておかないとな！なんて建前の元、隣の家に

ｗｋｔｋしながら向かった。今回もどうやらこの場所の長がお隣さんらしい。まあ今度は市長じゃなく町長さんだが。

突然訪問したにも関わらず家に上げてくれるお婆さん（町長）さんの話が耳に入らない。ごめんね、優しいお婆さん。今はそれどころじゃないんだ。もっと重要ｎ

「あれ？初めて見る人だ！こんにちは！」

そこには天使が居た。

艶やかで美しい金髪。まだ幼児体型ながらもスラっとした印象を受ける体。見つめていると引き込まれそうな銀色の目。そして将来絶対美人になると何故か確信できてしまうほど整った顔。

間違いない。この子はーーー

「初めまして！私はシロナって言うの！あなたの名前は？」

シロナ様（幼少期）だ。

隣人と憧れの人

日本のみなさん（読者）いかがお過ごしだろうか。こちらは天使に遭遇した様だ。

かわいい（思考停止）

「初めまして！私の名前はシロナ！あなたの名前は？」

「えっあっ…うん。俺の名前はハルト。よろしく。」

「ハルト君これからよろしくね！」

手を握られた。嬉しすぎてなんかよくわかんない。なんか凄い柔らかいしいい匂い。ヤバいヤバいヤバい。って何やってんだグズマアアア（ハルトオオオ）！これじゃ唯の変態じゃねぇか！

はぁ…はぁ…少し落ち着いた。ここまで僅か五秒。何？普通はもっと早いだろって？コンマ何秒の時間でここまで考えるなんて無理があるだろ。

とりあえず状況整理だ。引っ越した先がカンナギタウンだった。お隣さんがシロナ様だった。シロナ様可愛い。よし、大丈夫だ。

俺はポケモンのキャラの中でシロナ様が好きだった。最初にソウリュウシティで目覚めた時はちょっとガッカリしたくらいだ。でも奇跡的にシロナ様と知り合えたんだ。これは頑張って友好的な関係を築くしかないだろう。

とにかく、何か言わないとさっきから無言で百面相してる変な人になってしまう。とりあえず遊びに誘えばいいのか？シロナ様の好きな物…考古学？…は年齢的にまだだろうしやっぱりポケモンの話題かな？

「シロナちゃん。」

「なあに？」

「この辺ってどんなポケモンがいるの？俺はイッシュ地方から来たからシンオウ地方のポケモンとかも見てみたい。」

「この辺にはねー。コダックとかポニータがいるよ。」

「一緒に見に行かない？」

「いいよ！」

マジ天使ですわ。貢ぎたい。

〝シロナちゃん〟と一緒にカンナギタウン周辺のポケモンを見に行って分かった事が三つあった。

まず一つ目、ゲームではストーリーが進むまでカンナギタウンへの道を頭痛を患ったコダック達が塞いでいたが、どうやら割とよくある事らしい。

二つ目、ゲームではシロナ様に秘伝の薬を貰ってコダックを治していたが、これも一つ目に伴って常に用意してあるようでコダック達による封鎖は直ぐに解除された。ちなみに頭痛が治った後のコダックはいつも通りのマヌケ面で、初めてみるリアルなそれに不覚にも吹いてしまった。

そして三つ目、どうやら〝シロナちゃん〟はもうフカマルをゲットしている様だ。しかも陽気な性格をしたフカマル（将来600族）で、ウチのモノズ（将来600族）とも直ぐに仲良くなった様だ。

〝シロナちゃん〟と別れた後は何事もなく一日が終わった。

とりあえず今後の方針としてはモノズと付いて来ていたケーシィを育てつつシロナちゃんと友好を深めていくとしよう。

でも今は詳しい事を考えるよりも体が欲している睡眠をとろう。子供の体では夜更かしができないのが辛い。

隣人の学校／隣人の救助

日本のみなさん（読者）いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら学校に通う様だ。
マタジカンガトンデシマッタ…

俺がカンナギに引っ越して一年。時間が飛ぶのはデフォルトだから許してくれ。
まあそれは置いといて、少し前から俺とシロナちゃんはトバリシティにあるトレーナーズスクールに通っている。
と言っても、毎日カンナギから通っている訳ではなく、寮に入っている。ん？９才が寮に居るのはおかしい？１０才で旅に出ても笑顔で見送られる世界だぜ？今更だろ。
ともかくトレーナーズスクール、学校に通っている訳だがこの学校には”四天王”と呼ばれる存在がいる。まあ俺も一応その内の一人ではあるんだが、とにかくその面子が凄かった。
まず俺、これはいいだろう。そもそも前世の記憶とそれに付随するポケモンの知識が

あるからトップクラスに入るのはある意味当然とも言える。
次にシロナちゃん、これもいいだろう。シロナちゃんも将来的にはこの地方のチャンピオンになるんだ。子供の頃から強くても不思議ではないだろう。
実は残り二人も強いのが不思議ではないのだが…
「ねぇ、図書室に行くんだけど一緒に行かない？」
「ん？いいよ。行こう。」
シロナちゃんに呼ばれたので図書室に着いてから話すとしよう。四天王の三人目は基本的にそこにいる。
「これはいいタイミング、ちょうど本を読み終えたところでした。ハルトさん、シロナさん、何の本をお探しですか？」
三人目はゴヨウ。まあわかりやすく言うと
未来(原作)でシンオウリーグ最後の四天王をしていたエスパー使いの男だ。ちなみに年齢は9才で、相棒はドーミラーだ。
「あー…俺はシロナちゃんに着いてきただけだから。」
「相変わらず仲がいいようで羨ましいですね。」
「おう。そっちも相変わらず本の虫だな。」
ゴヨウは外で遊ぶよりも本を読むのが好きなようで、図書館の主と言われている程

だ。

　しっかしコイツ９才で敬語上手いな。

「ねぇゴヨウ君、神話の本ない？」

「神話…ですか…それなら確かこっちに…あ、あった。」

「この『シンオウ地方の神話集』でいいですか？」

「うん、それで大丈夫。ありがとう！」

　最近シロナちゃんはお婆さんに見せて貰った伝説のポケモン（時間と空間を司る者）に魅せられて、神話の勉強を始めた様だ。未来の考古学者は格が違った。なんだよ９才で神話の勉強って…

　四天王最後の一人だが、これも何処にいるかが大体決まっている。なのでその場所ーーー屋上に来てみた。するとーーー

「やあハルト。やはりこんな世界は壊して新世界を創らなければならないと思うのだがどうだろうか？」

　やっぱり居た。会って早々に物騒な事を言うコイツはアカギだ。そう、ギンガ団ボスのアカギだ。アカギは家庭の事情で入学が遅れた様で、４つ上の１３才だ。と言っても珍しい事ではなく、９才から１４才くらいまではゴロゴロ居るのでクラスで浮くこともない。うん…年齢だけなら浮くことはなかったんだがこの変人キャラのせいで浮いて

しまっている。

　でも実はこのキャラは中二病によって造り上げられたキャラであって素の状態だとーーー

「え?無視?俺なんか気にさわることした?ごめんなさいごめんなさいあやまるから許して!」

「ごめん考え事してた。」

「ふ、ふふふ…私を前に考え事とはその度胸は称賛しよう。」

「…」

「ごめん今のやっぱ無し!」

　弄ると面白くて、ポケモンと機械が好きなだけのポンコツだ。だから俺は原作アカギも実はこの中二病キャラのせいで引っ込みが付かなくなっただけなんじゃないかと思ってる。

　ちなみに相棒はニューラ。ちなみにこのニューラもご主人様に似たのか、意味深な態度をしてはモノズに弄られて表情を崩されている。

金曜が終わり土曜になると学校もお休みで、俺とシロナちゃんはカンナギに帰って来ていた。
帰って来て早々に近くの川にポケモン達と遊びに来た。宿題？学校で終わらせた。
シロナちゃんもフカマルと一緒に来ている。癒しの波動でも使ってるんじゃないかと疑うくらい癒される。

暫く遊んでいると急にポケモン達が騒ぎだした。
「お、おいモノズ！どこ行くんだ⁉」
「あっ！フカマルもどこ行くの⁉」
急に走り出したモノズとフカマルを追って川の上流に行くとそこには二匹のポケモンがいた。コイキングに似た形。しかしコイキングとは明らかに違う茶色の体色。貧相ながらも少量の水さえあれば生き延びられるタフな体。
ヒンバスだ。
が、今はそのタフさが見る影も無いほど憔悴している。しかも二匹とも。
バトルで負けてなる『ひんし』ではなく瀕死だ。
「え？このポケモンさん…え？全然元気ないし…え？」
シロナちゃんは初めて見るかもしれない死の瞬間に怯えて立ち尽くしている。正直

俺も直ぐに目を反らして怯えたい。でも今はそれどころじゃない！早く治療しないと本当にヒンバスの命が潰えてしまう。けど治療するには俺一人じゃ足りないから先にシロナちゃんを！

「シロナちゃん！しっかりして！」

「え…うそ…やだ…」

クソッこうなったら！

「おい！シロナ！しっかりしろ！」

「っ!!!え？何？」

肩を大きく揺さぶりながら強く声を掛けるとやっと気がついた。でもとにかく今は！

「オレンの実かオボンの実を持ってきて。今すぐに！」

「う、うん！」

「ポケモン達も協力してくれ！」

野生のポケモン達も頷いてくれた。よし、やっとヒンバスの治療に入れる！

「もう大丈夫ですよ。」
「よ、よかったぁ～」
　応急処置をした後直ぐにポケモンセンターに運んだのだが…どうやら間に合ったようだ。でも運ぶ為に俺とシロナで一匹ずつモンスターボールに入れてしまったから逃がしに行かないといけないな…

　遊んでいた川に戻ってヒンバスを逃がす。でも逃がす前に一つだけ。
「なあヒンバス。俺はお前と旅をしたい。着いてきてくれるか？」
「コッコッコッ」
　ポケモンの言葉はわからないが喜んでいる様に見えた。
「やったぁ！これからよろしくね！」
　シロナも同じ事を考えていた様だ。ヒンバスを抱いて喜んでいる姿が見える。
　それにしてもモノズ、ケーシイ（６４レベ）にヒンバス（通信交換）とは…進化（美しさを上げる）が大変なパーティーだな…

隣人達の傍観者

日本読者のみなさんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら俺視点じゃないようだ。

ナントカカケタ。ヨカッタ。

異世界読者のみなさんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。俺はちょっと成績がいいだけのモブだ。覚えてくれなくていい。

…ハッ！俺は一体何を…遂に頭でもヘンになったか。まあそれでもあの人達に及ばないだろうが。

”あの人達”というのは、トバリトレーナーズスクールの四天王の事だ。具体的に言うならハルト、シロナ、ゴヨウ、アカギの事だ。彼らはこの学校の強いトレーナー筆頭であると共に変人筆頭でもある。

まずアカギ、この人は俺の一つ上で１３才。相棒はニューラ。四人の中でも変人度が一番高い人だ。授業中は教室に居ないか、何か機械を弄っている。同じ変人同士気が合うのかアカギと仲がいいハルトによると、教室に居ない時は屋上にいるらしい。…屋上には何も無かったと思うのだが…やはり変人か。そしてバトル含め成績は三位。強い。

残りの三人も変人ではあるのだが、妙に人気があるし、アカギに比べると変人度は劣る人達だ。

まずゴヨウ。この人は俺の三つ下の９才。ちなみに残り二人も９才だ。相棒はドーミラー。授業中はずっと本を読んでいる。…どころか話し掛けない限りずっと本を読んでいる。他に読んでない時といえばバトルをしている時位か？まあとにかく本の虫にも程があるゴヨウだが、さっきも言った様に人気がある。頭も顔もいいし、誰に対しても敬語で接しているのも大人っぽくて良いらしい。主に年上（ゴヨウからみて）に人気がある。男にはわからない。成績は四位。

次にシロナ。相棒はフカマル。最近ヒンバスが手持ちに加わったらしい。授業中はずっと何か別の勉強をしている。またハルトに聞くと、シンオウ地方の神話の勉強らしい。やはり変人か。この人は非常に容姿がいい。簡単に言うとすっごく可愛い。その可愛さ故に人気がある。しかも四天王の名が示す通り強い。可愛いのに強いというのも人気を高めている要因だろう。成績は二位。

最後にハルト。相棒はモノズ。最近シロナと同じくヒンバスを手持ちに加えている。そしてそれとは別にケーシィも持っている。この年で三体ポケモンを持っているなんて珍しい。授業中だが、寝ている。これだけなら普通なのだがその寝言が意味不明なのだ。なんでも、「めざ氷が…めざ炎が…」とか、「色厳選キツい…」とか言ってるらしい。しかもこれを起きている状態でも偶に言うのだ。例えば、テレビで破壊光線や火炎放射を使うガブリアスを見ると「変態型かよ!」とか、キュウコンを見て「あれ?今そんな天気よくないけど?」とか。うん。変人。そしてこの人は男女問わず人気?というかなんというか…凄く憧れられている、と言った方がいいか。ちょっとおかしな事も言うが、普段は大人びていて頼れる雰囲気だったかと思えば少し子供っぽくなってからかってきたり、そんなギャップが効果的な様で、男子は年上であっても兄貴分の様に、女子は…そうだな…カッコいい先生の様に扱う。それも、ポケモンの事にとても詳しいからだ。ポケモンの技だったり、道具だったり。偶に先生よりも詳しいときもあるほどだ。そして成績は一位。

しかも、他の三人より頭一つ飛び抜けている。と言っても、他の三人が並な筈もなく、五位を１００とすれば他三人は２００前後、そしてハルトが２３０といったところだ。改めて思う。四天王って化け物だ。

そんな個性の塊な四天王だが、やはり共通点もある。まずバトルが強いこと。これが

四天王たる所以でもある。そして何より、ポケモンへの愛情が凄い。勿論、俺や他の生徒もポケモンへの愛情を持っているのだが、四天王はなんというか…愛情の質？みたいな物が違うのだ。アレを見ていると自分が本当にポケモンを愛しているのか不安になってしまう程に。

　まあそんな怖い話は置いといて、今は校内大会だったりする。今は準決勝で、ハルト対ゴヨウとシロナ対アカギの二試合が行われている。俺？一つ前の試合でハルトと当たって負けたよ。こっちはグレッグルで向こうはケーシィ。タイプ相性が最悪だったよ。それにしてもあのケーシィ毒のダメージ受けて無かったような気がするな…まあ気のせいだろう。まあそんな事もあってこれから始まるハルトの試合を見ようと思っている。

　ゴヨウのポケモンはドーミラーか。まあ手持ちが一匹しかいないし当たり前か。さて、ハルトは…ってオイオイ。

「ヒンバス！行ってこい！」

　マジかよ…てっきりモノズが出てくるものだと思ってたのに…？しかもこれってヒンバス初陣じゃ…

「初めてのバトルだけど落ち着いて練習通りにな！」

マジか…本当に初陣だったとは…四天王相手に初陣なんて、あのヒンバスは凄い事をさせられるな。でもバトルのステージには水場がないがどうするのだろうか。周りを見てもみんな驚いている。驚いた表情をしていないのはハルトと何故か困った顔をしているゴヨウだけだ。

「ドーミラー！岩石封じです！」

さらに訳がわからない。ドーミラーはチャージビームを覚えていた筈なのに何故岩石封じを打つ？

「ヒンバス。波乗り！」

ヒンバスがどこからか生み出して来た大波で、岩石封じの準備をしていたドーミラーを岩ごと流す。でもドーミラーにはあまり効いていない様だ。

「雨乞いだ！」

その隙に雨乞いをするヒンバス。さっきの波乗りもあってなんとか泳げる位にはなった。なるほど、これが狙いか。そんな風に思っていると、ゴヨウが「遅かったですか…」と呟いた。ヒンバスが動ける様になっただけなのにそんな反応する事か？なんて疑問は次の瞬間解決した。

「ヒンバス、動き回れ。」

次の瞬間、一度だけ見たことのあるテッカニンをも上回るだろうスピードでヒンバス

が動き始めた。加速し続けるテッカニンには敵わないだろうが、初速では間違いなく上回っている。これは…俺達じゃ相手にならなさそうだ。恐らくハルトにはまだ策がある。四天王ならともかく他の奴等には対処できないだろう。

「催眠術だ！」

「っっっ！マズイ！ドーミラー、神秘のベールです！」

ドーミラーが状態異常にならないよう、神秘のベールを纏おうとするが一瞬早くヒンバスの催眠術が決まり眠ってしまう。こうなったら勝負は決まったような物だ。

結局、ハルトは準決勝も決勝のシロナ戦も勝って優勝した。俺もいつかはあそこまで強くなれるのだろうか。…そんな事を考えても仕方ないか。俺は俺のペースで進もう。

そういえば俺の名前を行ってなかったか。俺はイッセー。フルネームを漢字で言うと〝土門（ツチカド）壱星（イッセー）〟相棒はグレッグル。ちなみに、星で一番好きなのは自分の名前にも入っている土星（サターン）だ。まあどうでもいいか。成績は五位。四天王に大きく離されている〝１００〟の奴だ。案外、俺も直ぐに変人の仲間入りをするのかも知れないな…

例えば、ヘンな服を着て軍人口調で組織の幹部をしてたりとかな…それはないか。そ

んな突飛な考えが浮かぶ辺りもうおかしいのかも知れないな。

隣人の卒業

日本のみなさん(読者)こんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやらトレーナーズスクールを卒業するようだ。

ポケモンッテタノシイネ。コウシンワスレルクライニ。

「やっと終わった～」

「やっと終わった～」

あーやっぱ何処の世界でも偉い人の話は長いなぁ…ん？イキナリ何言ってんだって？遂に卒業しましたよ。学校。やっと旅に出られる。この5年近く、どれだけ旅に出たかったか…

それはさておき、ちょっとマズイ事態になった。俺、ひょっとしたらシロナ（将来）の手持ちを奪ったかも知れない。

どうしてそうなったかを簡潔に説明するならこうだ。まず、俺達が通っていた学校、トバリトレーナーズスクールでは卒業式の時に卒業生代表（今年は俺）にポケモンの卵を渡すらしい。それで、その卵から孵るポケモンがなんなのか聞いてみると「トゲピーが孵る」という答えが帰ってきた。トゲピーはシロナの手持ち（トゲキッス）のたねポケモン（進化する前）だ。

首席にトゲピー。トゲピー（トゲキッス）はシロナの手持ち。本来俺は居ない。本来の順位だとシロナが首席の筈。つまりシロナがトゲピーを貰う筈だった。俺が貰った。

あっこれやらかした感じですね。はい。シロナさんマジごめんなさい。

えー…これどうなんの？シロナの手持ちが色々変わるんだろうか、それとも、ＤＰとＰｔでは手持ちが違ったからそれらが混合されるんだろうか。やべぇ、やべぇよこれ。あーどうしようこれ。あーーーー

もういいや（思考放棄）どうにかなる。大丈夫。確証は無いけどきっとシロナさんなら俺が予想もつかないような事をしてなんとかするに違いない。それか、世界の強制力でも働くだろ（他力本願）俺はこのトゲピーを頑張って育てよう。それがいい。

そんな些細？な問題は置いといて、最初にも言ったがこれからやっと旅に出られるの

だ。これ以上に嬉しい事があるか？いや、ない（反語）

では、旅をするにあたって手持ちを再確認しよう。

まずモノズが１５レベ。ウチのエースだ。進化レベルが高いからもっとレベルを上げておきたかったが学校があるのでレベリングできなかった。

次に、実は夢特性だったケーシィが１３レベ。今まで影は薄かったが、俺のパーティーの中で一番火力を出せるポケモンだ。タイプ一致のエスパー技はとても強力だ。なお、アカギのニューラ（無効）とゴヨウのドーミラー（１／４）。

三番目にヒンバスが１０レベ。火力はイマイチだが雨乞いと催眠術でこちらのペースに持ち込むと強い。

最後にトゲピーだ。まだ孵化してないからなんとも言えないが。

こうして見ると、サザンドラ、フーディン、ミロカロス、トゲキッス。うわぁ…なんていうか…強そうなポケモンを適当に突っ込んだ感じだな…

それはともかく（閑話休題）、今は家に帰って旅の準備をしている所なのだが多分そろそろ…

ピンポーン

来たか。

「準備できたよ！早く行こう！」

俺はシロナと一緒に旅をする事にした。まあ下心ってのもあるが、それよりも俺はーーーーー

「寝袋とかちゃんと持ってきた？」

「あ…」

シロナ（ダメナ）を放っておけない。いつか死にそう。

隣人と博士

日本のみなさん(読者)こんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら偉い博士に目を付けられた様だ。

「ここに三つの石があるじゃろ?」

なんか違うしそれ後輩の台詞じゃねえか。しかもなんか既視感(デジャブ)を感じる…

少し前からシロナと共に旅に出た訳だが、俺の我が儘によりコトブキシティから旅を始める事になった。ん? 我が儘の内容? 単純にゲーム通り行きたかっただけだ。

クロガネシティに着いて早速ジムに挑戦しようとした訳だが、残念ながらジムリーダーのトウガンさん（まだミオシティに行ってなかった）がインフルエンザに掛かっているらしく、暫くジムがお休みだそうだ。

今までジムに挑戦できない憂さ晴らし兼ジムで活躍して貰う為に、シロナのヒンバスと俺のヒンバスでバトルをしていたのだが…

「君達は珍しいポケモンを持っているんだね」

なーんかシャガさんに似た感じの偉そうな人っていうか…気がつけばナナカマド博士がこちらを興味深そうな目で観察していた。
「こんにちは！」
「あぁ、こんにちは。」
「…こんにちは。」
上からシロナ、ナナカマド博士、俺である。だって考えてみろよ、眉目麗しい金髪少女と遊んでいたら急に横から凄い目でこっちを見つめるお爺さんが出現するんだぜ？誰だって多少どもる筈だ。目の色変わってたもん。怖えーよ。やっぱゲーム世界の博士ってどこもヤバい奴ばっかなのかもな。
「見たところ君達は…ジムに挑戦しようとしたが暫く挑戦できないから暇をもて余している様だね。」
「まあ…そうですね。」
「ハルト…」
なんか雲行きが怪しくなってきた。流石にシロナも怪しく思ったのか俺の後ろに隠れる。怯えているシロナも可愛い。
そ、それはともかく、ナナカマド博士もゲームじゃいい人だったが現実はそうとも限らないだろう。ここはキッパリと拒絶してーーーー

「だから、二人がいいなら珍しい物を見せて貰ったお礼に私の研究所の見学でもさせ「是非お願いします！」てあげ…ふふふ、大歓迎だよ。」
「やったなシロナ！」
「えっ？…ハルト？何言って…」
いやー、やっぱりナナカマド博士が悪い人な訳ないよな！めちゃくちゃいい人じゃないか！ん？そんな顔してどうしたシロナ？まるで味方だと思ってた幼なじみに裏切られた時の様な顔だぞ？

そんなこんなで俺達はマサゴタウンにある研究所に来た訳なんだが…流石は携帯獣学の権威。研究所の設備やポケモン達は珍しいものばかりだ。それにゴウカザル、ドダイトス、エンペルトの三匹は特に鍛えられているのだろう。明らかな強者のオーラを纏っている。ゲームではヒカリ（コウキ）任せだったが、少なくとも序盤の低レベルなポケモン程度なら鎧袖一触にできるだろう。…ん？そういえばナナカマド博士はバトルに於いて凄い功績を残してる訳じゃないよな…ということは、バトルでも功績を残し

ているオーキド博士は…いや、今は考えないでおこう。
研究所のポケモン達と遊び始めたシロナを呼び戻しナナカマド博士の話ーーーと言うより、講義に近いーーーを聞く。
「じゃあまず…ほれ。このポケモンは何か分かるかな？」
「イーブイ！可愛い！」
「イーブイ」
シンオウ地方では野生のイーブイをあまり見ないが、みんな知っているだろう。現実世界でいうチワワみたいなものだ。
俺達が即答するのを聞いて頷いた後、博士は徐に5つのボールを取りだした。そしてボールの中のポケモン達を解放する。
「わぁ！イーブイの進化系がいっぱい！」
「唯一王さんキリトさんオッスオッス」
ボールから出てきたのは唯一…ブースターにサンダース、シャワーズ、エーフィ、ブラッキーの五匹だった。
「このポケモン達は知っての通りイーブイの進化系だ。イーブイは進化の方法によって色んな姿になる珍しいポケモンなのだ。例えば…」
そう言った博士は赤、青、黄色の石を取りだし、

「ここに三つの石があるじゃろ？」
　博士にこれ以上言わせたらダメな気がして、咄嗟に話を引き継ぐ。
「これは炎の石、水の石、雷の石という石で、イーブイに使うとそれぞれブースター、シャワーズ、サンダースに進化するんだ。」
「へ～そうだったんだ。」
「ハルト君は物知りなのだね。」
　感心してくれるのは嬉しいが博士の台詞がどう聞いても博士（オーキド博士）の後輩の台詞にしか聞こえなかったぞ…しかも昔同じ様な事があった様な…
　昔の記憶を思いだそうとしている俺を置いて話は進む。
「そしてエーフィとブラッキーはトレーナーによく懐いたイーブイが朝か夜にレベルアップすると進化するのだ。」
「へー。イーブイって面白いね！」
「あ、シャガさんの時じゃん。」
「ん？どうしたかね？ハルト君。」
「うぇ⁉い、いや、何でもないです。」
「？」
「変なハルト。」

ちょっと傷付くんでそういうの止めて貰えませんかねシロナさん。

…ん？そういえばゲームではシンオウから後二匹追加されてる筈じゃ…

「そしてこれは私が最近発見した新種のポケモンなのだが…見たいかね？」

何時の間にか二つのボールを取りだしていた博士が言う。これが恐らく残りの二匹かな？

「見たい見たい！」

「勿論見たいです。」

「ほっほっほ。好奇心旺盛なのは良いことだ。」

微笑ましい物を見るようであり、同時に未来への期待を抱く様な目でこちらを見る博士が、笑いながらポケモンを見せてくれる。

「こっちの水色のポケモンがグレイシアで、葉っぱが生えているのがリーフィアだ。このポケモン達もイーブイの進化系で…って、聞こえていない様だね。」

「グレイシア可愛い…もふもふ…」

「あ、あはは…すいませんうちの娘（シロナ）が…」

「いや、いいんだよ。こうしてポケモンに愛情を向けられるのもいいトレーナーの才能だ。」

何があったか説明するとすれば、「グレイシアを見た瞬間にシロナが駆け出し、グレイ

シアに抱き付いた。」だ。シロナのパーティーがまた一匹決まったな。
結局、見ているこっちまで幸せになりそうな笑顔をしているシロナからグレイシアを引き剥がすのも躊躇われ、博士の講義はそこで終了してしまった。夕方になり、そろそろ帰らないといけないからと引き剥がしたが、寂しそうな目でグレイシアを見つめるシロナを見ると罪悪感が湧いてくる。
すると、流石に見かねたのか博士がこんな提案をしてくれた。
「そんなに気に入るとはね…グレイシアを渡す事は出来ないが、イーブイなら大丈夫だろう。どうかね、シロナ君。ウチには都合の良いことに、グレイシアに憧れているイーブイが居るんだ。君の手で育ててグレイシアにしてやってくれないか？」
そんな博士の提案をシロナが断る訳もなく、
「やった！がんばります！」
と、肯定を返していた。
それにしても…グレイシアは確かＢＷ２の時のパーティーだった筈だ。トゲキッスが居ないからてっきりＤＰかＢＷの手持ちになると思っていたんだがな…

俺というイレギュラーによって引き起こされたバタフライエフェクトはシロナの手

持ちに作用した。他にもこんな風にして原作と解離している物もあるかもしれない。ひょっとしたらアカギだってバタフライエフェクトによってあんな性格になったのかもしれない。今の所は悪い方向に作用してないから問題ないが、今後どうなるかは神のみぞ知ることだろう。ひょっとしたら別の悪の組織が出来たりするかもしれない。これからはそういった辺りも注意しておかないと危険かもしれないな。

隣人の危機

日本(読者)のみなさんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら命の危機が迫っている様だ。

「ハルト…」

「や、やめろ！やめてくれシロナ！誰か助けてくれ！」

「助けなんて来ないんだから、観念してね。大人しくしてれば直ぐに終わるから…ね？」

研究所でシロナの手持ちが増えてから3日。俺達はクロガネシティの近くで野宿をしていた。どうでもいいけどシロガネ山を間違えてクロガネ山って言っちゃう事ってあるよな。…え？無い？…そうか…

それは置いといて、野宿と言うことはご飯も自分で用意しないといけない訳だ。当然ながら、生活力が0に等しいシロナ(ダメナ)に任せる訳にもいかず、俺が料理をすることになった。

「おーいシロナー。」
「なにー？」
「もうすぐ料理できるから準備してくれ。」
「わかった！」
　ポケモン達と触れ合っているシロナに声を掛け、料理の仕上げに入る。完成したら、準備してくれたテーブルに料理を置き、食べ始める。
「いただきます！……いつも通り美味しい！」
「いただきます。まあこうなるだろうと思ってずっと料理の練習をしてたからな。」
「いつもありがとうね。」
「おう。任せとけ。」
「私も料理できたらなー…」
「…その前に片付けができるようになってからだな…」
「…それもそうだね。」
　どうやったらそうなるのかは知らないが、色々な物がめちゃくちゃに散乱しているリュック周辺を見ながら言う。…恐らく、テーブルや皿を準備した跡なんだろうが…幾らなんでも散らかりすぎやしませんかね？

「「ご馳走さまでした。」」
　食べ終わった後は勿論後片付け。言わずもがな、生活力０のシロナに以下略という理由でこれも俺の役割となる。
　片付けも終わり、振り向くとシロナがこちらを見ていた。どうしたのかと聞いてもなんでもないと返される。ポケモンか何かが見えたのかな?と納得し、ポケモン達のブラッシングに入る。
　思えば、この時から前兆はあった。早く気付いておけばこんな事にはならなかったのに…

　翌日。夕方まで掛けてクロガネシティまでもう少しの所まで来た。もうそろそろ暗くなるし、今日この辺りで寝ようかな。
「今日はこの辺りで休むか。」
「そうだね。もう少しで日も沈みそうだもんね。」
　テントを準備し、料理を始めようかという所で声がかかる。
「ねぇ。」

「ん？どうした？」
「今日はご飯の前に水浴びしていい？ほ、ほら、今日暑かったから汗かいちゃったしさ！」
「了解。じゃあ俺はその辺で誰か来ないか見張っとくよ。」
バレバレな嘘だったが、女の子には色々あるんだろうと察して了解しておく。今思えば、ここで追及しておけば防げたかも知れないのに…

「もういいよー」
シロナの声が聞こたからテントに戻る。
戻ってしまった俺が見たものは地獄の釜だった。詳しく説明するなら、コンロに置いてある鍋が地獄の釜に変化していた。なんだあれは。
「お帰りハルト。実は水浴びは嘘で、本当はご飯を作ってたの。ごめんね、嘘ついて。」
いやいやいや、嘘自体はまだいい。それより今なんて言った？『ご飯』って言ったよな。つまりその地獄の釜は…
「初めてだから上手くできてないかもだけど、食べて貰えないかな？」

そう言いつつ、地獄の釜を差し出すシロナ。
「ち、ちなみにこれはナニを作ったんだ?」
「実はね…カレーを作ってみたんだ。」
ほーん。シロナさんはこの黒くてベトベトでスカタンクの屁がマシに思える程の悪臭を漂わせるモノをカレーと呼ぶんですね。わかりません。
気が付けば、今さっきまで騒がしかった虫ポケモン達も息を潜めている。これはダメなやつですわ。
そしてシロナは所謂『あーん』をしてくる。こんな状況じゃなければ喜ぶが、今は逃げるしかない。
「あっ!ハルト待って!」
「無理!それ食べたら死ぬ!」

「はぁ…はぁ…」
俺はちょっとした洞穴に隠れる事にした。もうここまで来れば大丈夫だろう。ん?しまった!今のってフラグじゃ…

コツコツコツ
＼（＾ｏ＾）／

「ハルト…」
「や、やめろ！やめてくれシロナ！誰か助けてくれ！」
「助けなんて来ないんだから、観念してね。大人しくしてれば直ぐに終わるから…ね？」
天使の様な笑みを浮かべたシロナが地獄をスプーンに載せて差し出し、そこで俺の意識は途切れた。

「…うん？」
「あ、おはようハルト！」
「あーうん。おはよう…」
昨日の夜の記憶が無い。何かあったんだろうか…疲れて寝てしまったのかな？
「次は何を食べさせてあげようかな？」
「ん？何か言った？」
「ううん。なんでもない。」

隣人の初挑戦

日本のみなさん(読者)こんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら初のジム戦に挑む様だ。
「グハハハハ!こんなに強い挑戦者は久々だな!」

疲れて眠ったせいで、夕飯を作り損ねた日から数日。俺達はクロガネシティに着いた。いよいよ待ちに待ったジムへの挑戦だ。原作ではヒョウタがジムリーダーだったが、今はまだヒョウタの父親のトウガンさんがジムリーダーらしい。…ミオシティのジムリーダーはどうなってるんだろうか…

今回は最初に俺が挑戦し、その後にシロナが挑戦する。二度目の人生では初の挑戦ーーーといっても前世では画面越しだったがーーーではあるが、シロナの手前格好悪い所は見せられないため、全力で攻略しようと思う。ちなみに、シロナには観客席へ行って貰った。

「よくここまで来たな少年！次はジムリーダーの俺が相手だ。」
そして現在。俺はジムトレーナーを倒し、ジムリーダーのトウガンさんへの挑戦権を手に入れた。ところで、岩タイプのジムのジムトレーナーと言えば『タケシさんに挑戦なんて１００万光年早いんだよ！』のジムトレーナーが印象的なんだが、この世界でも戦うときに言ってくれるんだろうか。私、気になります！
…どこかの古典部部長が憑依した気がするが、きっと気のせいだろう。初めてのジム戦に緊張しているのかもしれない。
そんな事を考えていると、不意に声が聞こえた。
「ハルトー！頑張れーー！」
「お父さん頑張ってーー！」
シロナも応援してくれているんだから頑張らないｔ…ん？なんか一人多かった気が…
なんということでしょう。信じて送り出した幼馴染の女の子が男（ヘルメットを被っ

たショタ）と一緒に居た。あれれ～？おかしいぞ～？
なんて、死神（名探偵）に憑依されていると、今度は野太い声が聞こえた。
「おう！頑張るぞ！」
野太い声の持ち主はトウガンさんだった。ということは、あのショタがヒョウタ君か。なるほど、それならここに居ても不思議じゃないな。こうやって小さい頃からバトルを見て勉強していたから、原作で若くしてジムリーダーになれたのかもしれない。将来はジムリーダーだろうから、バトルするのが今から楽しみだ。
「グハハハハ！息子が応援してくれてるんでな、父親として格好悪い所は見せたくないから本気でバトルするぞ！」
「それはこっちの台詞です！」
遂に戦いが始まった。

「行け！イシツブテ！」
「行ってこい！ケーシィ！」
「ケーシィか…てっきりヒンバスだと思っていたんだがな！どんな工夫をしてくるのか楽しみだぞ！」

俺はジムトレーナー戦ではヒンバスを使っていた。まあ当然だろう。ヒンバスの波乗りを連打するだけで勝てる簡単な作業だ。今回も本当は、ヒンバスで無双する予定だった。

でも、そうする訳にはいかなかった理由がある。それは「まるくなる→転がる」とかいう鬼畜コンボのせいだ。一匹目のイシツブテはまるくなる→転がるをタイプ一致で放ってくる。どこかのノーマルタイプのジムとは違って、回復は（傷薬を除いて）しないからマシではあるが、代わりにそこと比べて威力が上がるとかいう頭おかしい事を平然とやってのけるらしい。

でも、まだそれだけならよかった。問題は、イシツブテの特性が『がんじょう』であることだ。これがあるせいで、ヒンバスがどんな攻撃をしようと一回は耐えられる。つまり、イシツブテの攻撃を喰らうと言うことだ。いくら『まるくなる』をしていない『転がる』の一回目だとしても、ヒンバスの紙耐久ではとてもじゃないが耐えらないだろう。そうなったら最後、威力の上がり続ける攻撃に耐えられずパーティーが壊滅するだろう。

だから今回はケーシイに、絶対イシツブテ倒すマンになって貰う事にした。勝つための条件は一つ。相手が最初に出す技が『まるくなる』であることだけだ。だから、その確率を上げる為に、ちょっとした策を用意した。

「イシツブテの対策はバッチリしてきましたよ！」
　こう言っておけば対応は『いつも通りの戦略』か『全く違う戦略』のニ択しかないだろう。そして、俺の想像通りならトウガンさんはーーー
「グハハハハ！それは楽しみだ！ならお望み通りやってやろう。イシツブテ！まるくなるだ！」
　よし！計画通りだ！
「ケーシィ！身代わり！そしてそのままアンコールだ！」
「っ！…なるほど、確かにこれならイシツブテは何も出来ないな。普通、その歳では攻撃する事にしか頭がいかない物だが…今でこれなら将来が楽しみだな！」
　さて、もう作戦は成功したが、ここからがこの作戦の要だ。
「ケーシィ！イシツブテが三回まるくなったらもう一度アンコールだ」
　イシツブテにもう一度アンコールをかける。相手が行動出来ないうちにさらに攻撃。
「エナジーボール！」
　イシツブテは岩・地面タイプだから、草タイプのエナジーボールは威力が4倍だ。勿論、イシツブテはそんな攻撃を耐える事はできないが、特性『がんじょう』で持ちこたえる。しかし、『アンコール』の効果はまだ続いている。
「そろそろアンコールの効果が切れたか。ケーシィ、もう一度アンコール！そしてその

まま自己暗示！」
「⁉そういう事か！自己暗示でケーシィの防御力を上げるのが目的だったのか！グハハ！素晴らしい戦略だ！」
「止めのエナジーボール！」
　イシツブテは倒れる。
「イシツブテ、お疲れ様だ。イワーク！行け！」
「ケーシィ！エナジーボールだ！」
　憐れイワークもエナジーボールの前に沈む…事はなかった。理由は単純。イワークも特性が『がんじょう』なのだ。攻撃に耐えたイワークは反撃してくる。『岩落とし』本来ならば、紙耐久なケーシィの身代わりは消えてしまうが、ここで『自己暗示』が効いてくる。
「やはりか！防御力が上がっているせいで身代わりが壊れない！」
　イワークを倒すとラスト一匹のポケモン。相手のエースタテトプスだ。でも、今のケーシィには敵わない。
「グハハハハ！こんなに強い挑戦者は久々だな！」
「ありがとうございます！でも手は抜かずに最後まで本気でいきますよ！」
「グハハハハ！それでよし！『ポケモンバトルは最後まで全力で！』それが強いトレー

ナーの条件だ！」
　ポケモンバトルは最後まで全力で…か。
「言われなくても最初からそのつもりです！」

　こうして、最初のジム戦は勝利で幕を閉じた。

「それでは、俺達の勝利を祝いまして」
「「かんぱーい！」」
　あの後、シロナも無事にバッジを手に入れる事ができた。そして今は二人だけの祝賀会だ。
「それにしても、ハルトのバトル凄かったね！」
「ありがとう。いやー…実は最初にまるくなる以外の技を出されてたら負けてたかもしれないんだけどね。」

「それでも勝ったんだから凄いよ！」
そ、そんなにべた褒めされたら…ね、調子乗っちゃうよ？いいの？
「いいよいいよ！ハルトは自信持っていいんだよ！」
「だ、だよな！よっしゃ！じゃあ……あれ？」
「ん？どうしたの？」
「いや、今、俺の心でも読んだ？」
「？」
「い、いや、なんでもない。」
ジム戦には勝てても、シロナには勝てない気がする。

隣人と花の町

日本(読者)のみなさんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやらモンスターと戦うようだ。

「粉塵！粉塵！粉塵！粉塵！」

コンナハズジャナイノニィ！

ジムへの初挑戦を勝利で収めた日から数日。俺達はソノオタウンに来ていた。

「うわー…すごい！すごい！」

「すっげーキレイだな…」

ソノオタウンを簡単に説明するなら、『田舎町ｉｎ花畑』だ。順番が逆だったり、ｗｉｔｈ（田舎町と花畑）だったりもしない。田舎町ｉｎ花畑だ。赤、青、黄、紫…多種多様な花が咲き乱れている。

「ねえねえハルト！」

「ん？どうし…」
「みてみて！綺麗な花がいっぱい！」
「あ、あぁ…うん、そうだな…」
「さっきからどうしたの？」
「あー……癒されるなぁって」
「ホントに綺麗だもんねー！」
お前の方が綺麗だよなんてキザな台詞は言えない。そんな事を言う気すら起きない。だって想像してみてくれ。
視界いっぱいに広がる美しい花畑。花の匂いに引かれて寄ってくる小さなポケモン達。その中で、とても容姿の優れた女の子が楽しそうに笑っている。
そんな、神々しさすら感じる程の光景を見せられた俺は、立ち尽くす以外の行動をとれなかった。
なんだ、これは。おかしい。凄く胸が苦しくて、心臓もバクバク鳴っている。これは…どう考えても…いやいやいや！シロナの事はずっと好きだったし、今まではこんな事なかった。でも、こんな症状なんて他には…
俺はそこで思考を止めた。まだこれ以上はダメだ。抱いてはいけない感情に蓋をして、シロナの方へ歩きだした。

「結局、夕方まで遊んでたな」
「でも、本当に綺麗だったよね～」
「確かに綺麗だったなぁ…」
　まさかシロナに見惚れて時間を忘れるとはな…それに昼間は疲れてたのか、おかしな事を考えていたしな。
「明日はどうする？」
「そうだな…谷間の発電所か、ソノオの花畑かな」
「お花畑に行きたい！」
「ん…そうだね、明日は木曜だし、発電所は明後日に行こうか」
「明後日は何かあるの？」
「まあそれは当日のお楽しみってことで」
「えー！教えて教えて！」
「ふっふっふ…それは秘密。でも、違いがわかりやすい様に、明日も見に行ってみない？」

「むー…」
「むくれてないで、もう遅いから寝るよ」
「はーいお母さん」
「誰がお母さんだ」
こうして、1日目が終わった。

2日目。今日は谷間の発電所に寄ってから、ソノオの花畑に来ていた。
「甘いミツはいらないかい？」
「じゃあ…10個下さい」
「まいどあり！」
これを木に塗ると次の日にポケモンが来るのか…そんなに美味いんだろうか。
ちょっと味見を…
「あ、これ甘くて美味しい」
「え？ホント？私にも舐めさせてくれない？」

「はいどーぞ」
「んーー！美味しい！」
　手持ちのポケモン達も匂いに釣られて出てきて、おねだりしている。よしよし、可愛いなお前ら。
　すると、一匹の野生ポケモンが近づいてきた。こいつは…スボミーか。
「このポケモン可愛い！」
　あ、なんか既視感（デジャブ）が…
「私、このポケモン捕まえる！」
　デスヨネー。まあ手伝うとするか。
「じゃあ、俺が甘いミツで気を引いとくからその内に捕まえて」
「うん！ありがとう！」
　なんかサファリパークみたいだな。まあそれはいいとして、スボミーが最終進化するとロズレイドになる。これは、ＤＰＰｔの時の手持ちだ。これで今のところフカマル（ガブリアス）、ヒンバス（ミロカロス）、イーブイ（グレイシア）、スボミー（ロズレイド）の四匹が揃った訳だ。シンオウ地方で捕まえられる他のポケモンはミカルゲ、ルカリオ、トリトドンか…さて、どうなるかな。

そして3日目。今日は金曜日だ。天気もいい。これならちゃんと集まっているだろう。

「シロナ、昨日見た発電所を覚えてるか？」

「うん、覚えてるよ」

「よし、じゃあ行こうか」

記憶力のいい人ならもうわかるだろう。発電所に着いて見えた物はーーー

「うわー！何これ！風船みたいなポケモンがいっぱい！」

「このポケモンはフワンテって言うポケモンで、何故か金曜日にここに集まるらしい」

「へー…これが手かな？」

「ちょっ！それ触っちゃダメなやつだから！」

「うぇぇ！そうなの？」

「うん。フワンテを持っていた子供が消えた事もあったらしいぞ」

「ほ、ホントに？…危なかったー…」

ポケモンってちょいちょい怖い設定あるよねー

暫くそうしていると、他にも人が集まってきた。ちょっとした観光地になっている様だ。人が集まると、その中にトレーナーも居るわけで。
「お願い！フカマル！」
「行ってきなさい！アゲハント！」
エリートトレーナーのお姉さんとシロナがバトルする事になった。
「アゲハント！銀色の風よ！」
銀色の風をよく見てみると鱗粉を飛ばしているみたいだ。アレでどうやって能力が上がるんだろうか。
「フカマル！火炎放射！」
オイ待て今はマズイ！
「粉塵！粉塵！粉塵！粉塵！」
鱗粉に火がつき、粉塵爆発が起きた。アゲハントとフカマルは勿論、俺達やフワンテも吹き飛ばされた。
コンナハズジャナイノニィ！

隣人と森の洋館（上）

日本のみなさん（読者）こんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやら不気味な洋館へお邪魔するようだ。

ソノオタウンの観光が終わり、そろそろハクタイシティへ向かおうということになったのだが、

「ここがハクタイの森か〜！」

「おーいシロナー！雲行きが怪しいから早く抜けない？」

ゲテモノ（虫ポケ）もイケるシロナさんはこんなときもマイペースにポケモンとお戯れになっている。うん、シロナ可愛いしポケモン可愛いだろうけど、そんな事言ってられそうにないんだよね？雲行きヤバいからね？

「ハルト！どうしよう！」
「だから言ったのに…とりあえず雨宿りできる所探そう。」
「ごめんなさーい！」
　まあ、こうなるよね。さて、雨宿りできそうなところはっと…あ、
「ハルト！あそこなら雨宿りできそうだよ！」
「いや、いやいやいや、絶対あそこダメだって。」
「大丈夫！きっと大丈夫！」
　無理無理無理。だってどう見てもさ、
「アレ絶対ヤバいやつだって！絶対何か出るやつだって！」
こんな所に建ってる不気味な建物なんて〝森の洋館〟しかないじゃん。ゲーム内でも幽霊に会える場所じゃん。じゃんじゃんじゃん。
「でもあそこ以外に雨宿りできそうな所は無いよ？」
「はぁ…じゃあ行くしかないか…」
　実際に見るとやっぱり不気味だなこの屋敷…というかシロナさんなんでそんなに楽しそうなんですかね…
「だって普段頼りになるハルトが怖がってるのが面白いんだもん♪」
　だもん♪って…ホント楽しそうでなにy…ん？

「まって、今シロナ心読んでなかった?」
「エスパーですから♪」
「殺されるぞお前」
　メインヒロインかよ。メインヒロインだわ（メタ）……こんな事して現実逃避してもダメだよな…仕方ない、入るか…

「「お邪魔しまーす」」

「いらっしゃいませ。雨宿りにでも来られたのですかな?」

　扉を開けるとそこには執事の様な人が立っていた

「えっ…え？」
「そうなんです…雨に降られちゃって…」
　いや、いやいやいや、なんで生きてる人が？というかここってあの森の洋館の筈だよな？
「その顔を見るにここは廃墟だと思って入ってしまわれたのですか？」
「あ、はい。…あっすいません別に不気味とかそういう訳じゃなくて」
「大丈夫ですよ。よく言われますから。」
　執事さん（仮）は可笑しそうに笑っている。怒ってないようでよかったが…ひょっとしてまだ事件か何かが起きてないのか？
「あはははは！ハルトは意外に怖がりなんだね～。」
「ふふふ、ここで話しているのも楽しいですがお客様をずっと立たせてもいけませんのでこちらの部屋へどうぞ。」
　なんだ…やっぱり何も起きてなさそうだな…
「ありがとうございます。ところで執事さんのお名前は…」
「私はセラ＝バルスと申します。気軽にセバスとお呼び下さい。」
　なんだか天空の城が崩壊しそうな名前だな。

「こちらになります。」
　大きな屋敷の中を移動してついた部屋はとても綺麗だった。調度品も豪華でいながら主張しすぎない、落ち着いた素晴らしい部屋だった。
「わ～すっごい部屋だねハルト…」
「すごいな…」
「ありがとうございます。ところで、お願いがあるのですが聞いて戴けませんか？」
「私達にできることならなんでも！」
「実は私が仕えているお嬢様はたまに来られる旅のお方にお話しを聞くのが大好きでして、是非会ってお話しを聞かせて貰いたいのです。」
「そのくらいなら是非やらせて下さい。」
「ありがとうございます。それでは少しお待ち下さい。」
　そう言ってセバスさんは部屋を出ていった。それにしてもＴＨＥ・執事って感じの人だったな…なんて考えているとシロナが楽しそうに話しかけてきた。
「ハルト最初びっくりしすぎでしょ！」

「いやーてっきり廃墟だと思ってたから…」
「ちゃんと大丈夫って言ったでしょ？」
「あー、俺の負けだ負け。煮るなり焼くなり好きにしてくれ。」
「あはは！どうしようかな～。」
　なんて雑談をしていると、ふと、部屋の角の所に〝もや〟が掛かっている様に見えた。
角度のない円の部屋に行かなきゃ（使命感）
「失礼します。」
「こんにちは。旅のお方がた。私（わたくし）はレティシア＝ガスパーと申します。」
「初めまして。ハルトです。」「シロナです！」
「お二人で旅をしているのですか？私と余り年も変わらなさそうなのに凄いんですね。」
「そんな事ないですよ～。私なんてハルトに頼りっきりで。」
「まあ、そうなんですか？」
「まあ、シロナを一人にしたらその辺で野垂れ死にそうだからね。」
「ひどーい！私そんなに酷くないもん！」
「ふふふ、お二人は仲がよろしいのですね。」

セバスさんと一緒に入って来た、これまたＴＨＥ・お嬢様って感じのレティシアさんは俺達の２つ上で１１歳らしい。暫く話していると口調も砕けてきて大分打ち解けられた気がする。すると、突然こんなお願いをしてきた。
「ねえ、突然で悪いんだけど私とポケモンバトルをしてくれないかしら。」
「ええ、いいですよ。」
「むー…」
即答するとシロナが白い目で見てくるが知らない。べ、別にバトルくらいいいじゃないか。
「シロナちゃん、大丈夫よ。ハルト君を取ったりしないから。」
「そ、そういうのじゃないって。」
「ふふふ。そういう事にしておきましょうか。」
お嬢様方が楽しそうだからツッコまないことにした。

おそらくバトル用の部屋でレティシアさんと対峙する。多分、他の客ともバトルしているのだろう。
「傷薬等のどうぐは使用禁止、使用ポケモンは１匹ずつ、審判はこのセバスが勤めさせて

いただきます。それでよろしいですか？」
「はい。それで大丈夫です。」
「それでは両者ポケモンを出して下さい。」
　今回はコイツだな。
「行ってこい！ケーシィ！」
「私のポケモンは強いですわよ！お願い！ゴースト！」
「それではバトル開始！」
　お互いの一致技がお互いの弱点か…これはまずいな。
「ゴースト！舌でなめる！」
「っ！ケーシィ！かわせ！」
　ケーシィが避けるよりも先にゴーストの攻撃が決まる。
「大丈夫かケーシィ！」
　なんとか耐えているがあれは…麻痺になっているな…それなら！
「ケーシィ！サイコシフト！」
「何その技？そんな技聞いた事がないわよ？ってゴースト！何故アナタが麻痺してるの⁉」
「サイコシフトは自分の状態異常を相手の移して回復する事ができる技なんですよ。マ

イナーですけど。」
「そんな技が…ってそれどころじゃない！」
「勿論！今度はこっちの番だ！ケーシィ！サイコキネシス！」
「ああ！ゴースト！」
　ちょっと卑怯かなとは思わないでもないが、なんとか勝つことができた。
「よくやったケーシ…ケーシィ？」
　何か青く光って…まさかこれは！
「ハルト！ひょっとしてそれって進化じゃない⁉」
「私のゴーストが進化した時と同じね。おめでとう！」
　青い光が一際強くなり、収まった後そこにはケーシィではなくユンゲラーが居た。
「遂に進化できたのかケーシィ、いや、ユンゲラー！やったな！」
「ユンゲラーおめでとう！」
「おめでとうございますユンゲラー！」
　フーディンへの進化は交換だから直ぐできるけど…まだ暫くはユンゲラーのままにしておこうかな。初めて俺が進化させたポケモンだし、直ぐに進化させるのは何か勿体ない気がする。
「それにしてもサイコシフトですか…まだまだこの世には私の知らない知識も沢山ある

のですね。」
「ハルトは特に物知りだしね～。私もサイコシフトなんて初めて聞いたよ。」
「俺もケーシィの使える技を調べていてたまたま見つけただけだよ。最初は俺もどんな技か分からなかったしね。」
そんな和やかな雰囲気のまま、もう一度部屋に戻ってお茶会をする事になった。
相変わらず、部屋の角には〝もや〟が掛かっていた。

隣人と森の洋館（下）

読者日本のみなさんこんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやらバトルが終わって一息つく様だ。

「…ふぅ。楽しいバトルだったわ。本当にありがとう！」
「俺も楽しかったです。それにケーシィもユンゲラーに進化できましたし。」
「前より頼もしくなったよね～」
　バトルが終わってポケモン達を回復した後、俺達は二階の右から二番目の部屋で休憩していた。
「あ、この羊羹美味しい！」
「どれどれ…ホントだ…めちゃくちゃ美味しい！」
「それはセバスの作った羊羹なの。我が家自慢のお茶菓子よ。よかったら少し持って帰る？」
「はい！ありがとうございます！」

「やったぁ！ありがとうレティシアさん！」
　これがゲームでもあった『もりのようかん』か。これを『なんでもなおし』代わりに使うのはもったいない美味しさだ。
　もやが広がった気がした。

　レティシアさんと話しているときにふと、視線を感じた気がした。その方向を向いてみるとレティシアさんがいた。気のせいだな。
「ねえレティシアさん。なんでそこにある肖像画は目が赤いの？」
　シロナに言われて見てみると確かに赤い目をしていた。シロナはよく気がついたな。というか、あれ？
「目…動いてないですか？」
「またゲンガーね！出てきなさい。」
　レティシアさんが一声掛けると、どうやらイタズラが成功したのが嬉しかったのだろうゲンガーが出てきた。
「まったくもう…ゲンガーがごめんなさいね。」
「ううん、ちょっとビックリしたけど大丈夫！」

「ありがとう。あ、そうだ！ちょっと待ってて」
何かを思いついたらしいレティシアさんが部屋を出ていった。どうやら音的に右端の部屋に行ったようだ。
「それにしてもここのポケモンは人懐っこくて可愛いね！」
「ポケモンはトレーナーに似るって言うけど本当なんだろうな。」
なんて会話をしていると、レティシアさんが戻ってきた。
「さっきのお詫びとバトルのお礼にこれをあげるわ。」
「これは…身代わりの技マシンですか。」
「そう、どうせもう私達は使わないから…」
そう言ったレティシアさんは少し寂しそうだったから、深く詮索はしない事にした。
もやがもうすぐ限界を迎えそうな気がした。

技マシンを貰った後も少し話していたら、レティシアさんがこう言った。
「ごめんなさい、この後ちょっと行かないといけない所があるから私はそろそろ失礼するわね。」

「雨宿りさせて貰ってありがとうございました！…ん？雨宿り？」
「そういえば雨宿りをしに来たんだったね私達…」
「うふふ…楽しんで貰った様で嬉しいわ！」
「いつの間にか雨も上がってたみたいだし俺達も帰るか。」
「そうだね～急いでハクタイシティに行かなきゃだね。」
「じゃあ私も少しお見送りしようかしら。」
　そのまま玄関まで行くとセバスさんも玄関で待っていた。
「今日はお嬢様と遊んでいただいてありがとうございます。久しぶりにお嬢様が楽しそうにされているのを見れて、もうこの爺は思い残す事はございません。」
「もう、セバスったら。」
　その場で嘘泣き始めたセバスさんを見て全員で笑う。ゴーストやゲンガーも笑っていた。
「それじゃあ、ありがとうございました。」
「ありがとうございました！」
「ええ、アナタ達の旅の幸運を祈ってるわ。」
「私も、祈っております。」
　もやがこれ以上は無理だと軋んでいた。

森の洋館を出て空を見上げるとそこには虹が架かっていた。
「楽しかったね！」
「ああ、そうだね。また今度近くを通った時は遊びにこようか。」
「あれ？アナタ達森の洋館で肝試しでもしてたの？」
急に話しかけられ、そちらを向くと同い年くらいの、髪がオレンジ色でおかっぱ頭の美少女がいた。
「私はナタネ。ハクタイシティに住んでてこの辺りはたまに通るんだけど昼間から肝試しする人は初めてみたわ。二人はどうしてこんな時間に？」
「えーっと、ごめん。肝試しってどういう事？」
「え？だってその館は昔…」

「ゴース達ごめんね、普通の館みたいに装ってもらって。大変だったでしょう。」
「お嬢様、そろそろお時間です。」
「ええ、分かってるわ。最後に思う存分遊べてよかったわ。」
「私も本当に思い残す事はございません。」
「あら、冗談かと思っていたわ。」
「いえいえ、この爺が最後に望むことはお嬢様の笑顔です。」
「これからも同じ所にいるんだからいつでも見られるわよ。」
「それはそれは、まだまだ執事として働かなければなりませんね。」
「そうね。これからも一緒にいて頂戴。」
「ええ。」

廃墟の様な館には、ポケモン以外に誰も居なくなった。

隣人と将来の夢

日本のみなさん(読者)こんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやらナタネと一緒にハクタイシティに向かった様だ。

「無理ムリむりぃ！もう絶対あそこの前通れない！」
「大丈夫だから！あの人達優しかったから！」
いきなり何を言っているか分からないと思うが、今は森の洋館の前で出会ったナタネと幽霊について話している所だ。なんでも、森の洋館は過去に凄惨な事件があって今は誰も住んでない筈らしい。
「うん、全然怖い幽霊とかじゃなかったし、住み着いてるゴーストポケモン達も愉快な奴等だったよ。」
「それでも怖いものは怖いの！」
しかも森の洋館では幽霊が出るとの噂があり、たまに肝試しで入り、怪奇現象に出く

わし逃げ帰る人がいるようだ。そこで、ナタネに自分たちが出会ったレティシアやセバスさんについて話すとこの有り様だ。
「私ほんっとうに幽霊とかダメなの…想像するだけで…あぁ、今日は一人でトイレ行けない…」
　原作よりも何年も前だから当然の様にロリなナタネのトイレ発言で起立した紳士の皆様はどうか着席して貰えないだろうか。ジュンサーさん、こっちです。
「とりあえずそろそろハクタイシティに着くから案内して貰えないか？」
「うぅ…恨むからね…。…よし！案内は任せて貰っていいよ！」
　ナタネは恨み言を呟いた後、一つ気合いを入れ直しハクタイシティを案内することを快諾してくれた。と言っても、そもそも最初会った時にナタネの方から「案内してあげるよ」と言ってきたので快諾も何もないんだけど。
「わぁ！何あれ？」
「あれは…銅像？」
　町の中にあるちょっとした丘の上には何かのポケモンを模した銅像があった。
「あぁ、これはね。シンオウ地方の伝説に出てくる神様の像なの。なんでも空間を操れるらしいのよ。凄いよね。」
「あ、知ってる！パルキアでしょ！」

あぁ！ゲームでもあったあの銅像だったのか！パルキアにあまり似ていないから分からなかったな。そしてシロナは神話を勉強しているおかげか直ぐにパルキアの名が出てきたようだ。
「パルキア？へぇ！このポケモンパルキアって言うのね⁉」
「俺達が住んでたカンナギタウンには神話についての本もあってね、シロナなんかは今勉強中だから特に詳しいんだよ。」
「そう言えばここに…ほら！壊れてて読み辛いけどここにパルなんとかって書いてあるのはパルキアだったのね。」
「なになに？…うみだされし　パル……　いくつかの　くうかんを　つくりだす　いきていても　そうでなく……　おなじ　くうかんに　たどりつ……　それは　パル……の　おかげだ」
「欠けてて読めないね…ハルト、何か間に入る言葉思い付く？」
「ごめん、シロナ。分からないね。でも、文字数が合わないけどなんとなく埋める事はできるからそれでもいいなら。」
「全然大丈夫だよ！」
「それなら…産み出されしパルキアは幾つかの空間を造り出す。生きていてもそうでなくても同じ空間にたどり着ける。それはパルキアの力のおかげだ。かな？」

「えぇ…あなた達本当に私と同年代？というか、ひょっとして凄く頭いい？」
　しまった。シロナと神話の話しを始めると周りが着いてこられなくなる事を忘れていた。
「ごめんね～、わたし達考え出すと二人して周りが見えなくなっちゃうんだよね～。」
「将来考古学者とかになるつもり？」
「それいいね！わたしの将来の夢決まったかも！」
　どうやらシロナは考古学者になる決意をしたようだが…
「俺は…博士になりたいかな。」
「うわー、二人とも将来の夢が叶えば大物じゃない。今の内に仲良くしておこうかな。」
「勿論！仲良くしようねナタネちゃん！」
「あはは、現金だなぁ…そういうナタネの将来の夢は？」
「私？私は…まだわかんないなぁ…って、いやいや、私達今何歳か分かってる？」
「「９歳でしょ？」」
「だよね⁉普通この歳でそんな将来の事を真面目に考えてる人の方が少ないと思うんだけど…」
「「？」」
「あー、うん、なんでもないわ。」

ナタネは不思議な事を言うな…小さい頃の方が夢決まってたりすると思うんだけどな。

「あ、そうだ。そう言えばハクタイシティってジムあったよな？」
「ん、あるよ。ほら、そこに見えてる建物がハクタイジムだよ。」
町を一通り案内して貰った後、挑戦する予定のジムについて聞く。
「草タイプのジムだったよね？」
「うん、ハルトくんとシロナちゃんはジムを巡ってるの？」
「ふっふっふっ…聞いて驚いて！もうジムバッチを一つ持っているのです！」
「凄い！この歳でもう持ってるんだ！」
「この間クロガネシティに行って挑戦してきたんだ♪」
妙に自慢気なシロナは胸を張って、新しくできた友人に自分の成果を告げて（可愛い）いた。
「そんな訳で明日にでも俺達は挑戦しようかなと思ってるんだけど、よかったらバトルを見に来る？」

「オーケー！絶対見るわね！」
「それじゃあそろそろいい時間だし、また明日。」
「また明日ね～。」
「バイバイ！」

次の日、ジムバトルに勝利して俺は無事にバッチを手に入れた。そして今は回復と休憩を挟み、これからシロナの挑戦が始まる所だ。
「頑張れよ！シロナ！」
「頑張れー！シロナちゃん！」
約束通りナタネも挑戦を見に来てくれたから一緒に応援する。
「そう言えばシロナちゃんの手持ちってどんな感じなの？」
「エースのフカマル、俺と同じヒンバス、ナナカマド博士から貰ったイーブイとこの間捕まえたスボミーだ。」

「ジムリーダーさんの手持ちが今さっきと同じならチェリム、マスキッパ、モンジャラだから…ヒンバスとスボミーには厳しいかもね。」
　確かにヒンバス（水タイプ）は言わずもがな、スボミー（いまひとつ）も火力が足りない可能性が高いな。でも、それだけでシロナが負けるとは思わないな。
「それをどうにかするのがトレーナーの戦術じゃないかな。ほら、早速シロナがヒンバスを繰り出したぞ。」
「ホントだ。でもどうするんだろう。」

「ヒンバス！まずはダメージを減らそう！リフレクター！」
「物理攻撃半減か…それならソーラービームだチュリネ！」
「続けて光の壁もお願い！ヒンバス！」

「ヒンバスってあんな技使えたんだ…」
「まあ滅多に見ないポケモンだから知らなくても当然だね。でも多分あのソーラービームは…」

「撃て！ソーラービーム！」
　チュリネによって凝縮された光のエネルギーがヒンバスに放たれ、轟音と共に土煙が舞う。そして煙が晴れるとそこには「ひんし」になったヒンバスが横たわっていた。

「やっぱり受けきれなかったか。」
「やっぱりダメじゃん！」
「いや、多分シロナはこの事も予想してるんじゃないかな？」
「どういう事？」
「だから、倒されるのも計算の内で、その後のポケモンの為の場を整えたんじゃないかな。」

「ごめんねヒンバス。でも！あなたが作ってくれたこの場を上手く使ってみせるからね！」
「お願い！スボミー！」
「お嬢ちゃん、草タイプの専門家に草タイプで挑む勇気は買おう！でも専門分野で簡単

に負けると思うなよ！」
「チュリネ！日本晴れでお前の真の力を見せてみろ！」
「スボミー！成長！」
「む、日本晴れのせいで効果が上がってしまったか。マズイな。ソーラービームだ！」
「スボミー！耐えてもう一度成長！」

「これは…もう詰(積)みだな。」
「そう言えば成長は日差しが強い時に効果が上がる技だったね。」
「ああ、それにさっきの光の壁でスボミーへのダメージも殆どないからいまひとつのソーラービーム余裕で耐えられるんだ。」
「これを見越してヒンバスを…」
　ナタネがヒンバスを出した意味を理解した頃にはもうシロナのスボミーは三回目の成長を積んでいた。

「さっきの少年の連れだから舐めない様にしていたがまさかこれほどとはな…」
「スボミー!メガドレイン!」
　6段階も特攻が上がったスボミーの技をいまひとつ程度で耐えられる訳もなく、ジムリーダーのチュリネは倒れた。そしてスボミーが負った傷もメガドレインの効果で塞がっていく。
「もう一度メガドレイン!」
　交代で出されたマスキッパもモンジャラも当然の様に一撃で倒される。そしてここにジムバトルの決着がついた。

「君達には本当に驚かされたよ。ひょっとして年齢を偽ってないかい?」
「そんな事しませんよ、わたしのポケモン達が頑張ってくれたお陰です!」
「俺も右に同じく、普段の特訓の成果ですよ。」

年齢詐称の冤罪を疑われながら（勿論冗談だと分かった上で）バッチを貰いジムを後にすると、ナタネが決意に満ちた目でこちらを見つめてきた。
「ねえ、私の将来の夢決まったよ。私、ジムリーダーになる。」
「その心は？」
「今日の二人のバトルを見てて、すっごくワクワクしたんだ。ポケモンのタイプ相性だけで決まらない勝負もあるのか！って。」
「私は草タイプのポケモンが好きだしバトルも好き。でも負けるのは好きじゃないから勝ちたい。だけど草タイプだけじゃ相性悪いポケモンを出されれば負けるな～って思ってたの。」
「でも、相性が悪くても戦術によってはそれをひっくり返せるんだって知った。それなら誰よりも草タイプに詳しくなって誰よりも草タイプで強くなりたいの！」
「だから、ジムリーダーになって草タイプの専門家になってやろうかなって思ったの。どうかな？」
「いいな！その夢！」
「えへへ、できるかどうかは分からないけどね。」
「絶対できるよ！」
それは断言できる。原作ジムリーダーは伊達じゃない。少しの説明でシロナの戦法

が理解することができたのだから頭もいいだろう。

「それじゃあ誰が一番早く夢を叶えるか競争しようか。」
「いいね、それ。」
「えっ…二人と競争するのはちょっt」
「ビリには罰ゲームでいいかな。」
「本気でやらないと負けちゃうよ?」
「あぁぁ!もう!いいよ!絶対勝って罰ゲームしてもらうからね!」
　ナタネのジムリーダー就任をお祝いするパーティーで主賓の筈のナタネがいつかの罰ゲームをやらされる事になるのはまだ先のお話である。

コラボ回　隣人とガチャ

日本のみなさん(読者)こんにちは。いかがお過ごしだろうか。こちらはどうやらバウ様の「ポケモンガチャはじめました」とコラボする様だ。

俺が博士になり、シロナが考古学者兼シンオウチャンピオンとなってから数年。俺はポケモン博士の間（特にウツギ博士）で話題になっている、ある島に向かっている。その島の名は『オレノ島』で、通称『ポケパーク』と呼ばれている。なんでも、この島にある店ではポケモンの卵がガチャで引けるらしい。

…いや、色々とおかしいだろう⁉しかも稀に伝説や幻のポケモンの卵が出る事もあるとか無いとかの噂まであるらしいと聞いた。百聞は一見にしかずとも言うし、行く事にした。

「この度は、ご乗船、ありがとうございます。当船はまもなく、オレノ島唯一の港、ラプラ港へと到着致します。お忘れ物などございません様、お気をつけてお降り下さい。」

「やっと着いたか…」

島に着いたらまず５００円を払ってポケパークへと入場する。

「そして入って目の前にあるのがビクトリーショップか。確かここでポイントカードを作るんだっけ？」
「ようこそポケパークへ！お客様の言った通り、まずここで皆様にはポイントカードを発行していただきます。トレーナーの方はこちらに、トレーナーでは無い方はこちらにお並び下さい。」
　俺の呟きを聞いていた様で、店の中からビクティニを伴って人が出てきた。その人は他の客を誘導した後、俺に話しかけてきた。
「こんにちはハルト博士。ようこそおいで下さいました！私はここのオーナーです。是非『店長』とお呼び下さい。」
「こんにちは。こちらこそ、お呼びいただきありがとうございます。私の事も気軽にハルトと呼んで下さい。」
「それでは、ハルトさんと呼ばせていただきますね。どうぞ、ハルトさんもこちらでカードをお作り下さい。」
　社交辞令もそこそこに、この島で使うポイントカードを発行する。ここでは、お金の代わりにポイントを使って物を買ったりサービスを受ける仕組みで、そのポイントは独自のシステムによって、バトルをする度に支給される様だ。
「それじゃあ早速、例のガチャを見せて貰えないかな？」

「おっ？社交辞令タイムは終了か？…ほら、これだ。」
　今回呼ばれた時に条件として、話題のポケモンガチャを1回させて貰う事にした。何で1回だけなんだって？そりゃ、オーキド博士達の様に廃課金してガチャを回す様には成りたく無いからな…（詳しくはコラボ元を読んでね！）
「パッと見、普通のガチャなんだがなぁ…おぉ！本当に卵が出てきたな。さて、何が産まれるんだろうか。」
「それは分かんねぇけど、運が良ければ伝説のポケモンが産まれる事もあるぞ。」
「あれってマジなの？」
「マジマジ。一応、非売品だけど伝説のポケモンの卵もちゃんとあるしな。」
　店の奥で特別に見せて貰ったが、噂は本当だった様だ。え？何のポケモンかって？それはちょっと防犯上ＮＧなんだ。許せ。
「幾らかポイントは入れておいたから、明日のイベントまでポケパークを楽しんでくれ。」
「分かった。ありがとう、店長！じゃあ明日の試合で早速コイツを使う事にするよ。」
　呼ばれたイベントの打ち合わせ等を済ませて店を後にする。
「まずはどこへ行こうか。バー『ドクケイル』は…酒が飲める年になってるとは言え、昼間から酒を入れるのもな…古代の山にでも行って古代ポケモン相手にバトルでもして

いようかな。卵から産まれるポケモンも鍛えないといけないし。」

　さて、イベント当日。準備を終えた俺は『ムンナ吐息』と言うホテルを出て『ポケモンコロシアム』へと向かう。
「おはよう、店長。」
「ん？おはよう、ハルトさん。良く眠れたか？」
「めちゃくちゃ寝やすくてびっくりしたよ。お陰で俺もポケモンも体調はバッチリだ。」
「そりゃ良かった！ウチのホテルは『心地よい眠り』が信条だからな！」
「そりゃ寝やすい訳だ。…さて、改めて、俺の作ったルールをイベント大会とは言え実施してくれてありがとう。感謝してるよ。」
「いやいや、こっちこそ面白いルールを作ってくれて感謝だよ。恒常にするかどうか、今回で試させて貰うつもりだ。」
「それはそれは、採用される様に俺も気合い入れないとな！」
　そろそろ俺が何で呼ばれたかを話そうか。俺が『ポケモンバトルに置けるトレーナーの実力の差とポケモンの実力の差』と言う論文の中で提案した、とあるルールを採用し

た大会を行うからゲストとして優勝者とエキシビションマッチをしてくれないかと、店長から依頼が来たのだ。そして、元からポケパークに興味があった俺にとっては渡りに船でその依頼を受け、今に至る訳だ。

　そんな事を考えていると、大会がもう始まる様だ。店長が大会ゲストである俺を紹介してくれたので、挨拶をする。

「どうも、ご紹介に預かったハルトと申します。この大会に集まってくれたみなさんこんにちは。いかがお過ごしですか？私はポケパークに呼ばれていいホテルで眠れてとても充実しています。」

　少し笑いが取れた。よかった…昨日1時間掛けて考えた甲斐があってホッとしたよ…それはそうと、ルール説明も請け負っているので、まだ気は抜けない。

「それでは、ルール説明をハルト博士からお願いします。」

「みなさんお分かりだとは思いますが、この大会は『フラットルール』採用の大会です。フラットルールでは、レベルが51以上のポケモンは～～～です。以上で、説明を終わります。」

　説明？日本のみんなならフラットルールで分かるでしょ？（読者）

　…ハッ！また何処かから電波を受信していた様な気がする…

「それでは…『フラット』大会をここに開催します！」

店長が開催の合図を出した。今回の参加者は様々な地方の凄腕トレーナーばかりだと聞くから、エキシビションも期待できそうだ。

優勝者は、アローラ地方のモアナと言う少女になった。最後まで落ち着いたプレイングで相手の隙を突き、優勝を勝ち取って行った。これは面白そうだ。

「それでは、優勝したモアナさんには優勝トロフィーと5万ポイント。そしてハルト博士への挑戦権が与えられます！エキシビションマッチはこの後休憩時間を挟んで開始されますので、今の内に～」

そして、優勝者やポケモンの回復が終わって遂に俺の出番だ。

「皆様お待たせ致しました。ここからはこの大会の優勝者モアナとフラットルールの発明者ハルト博士によるエキシビションマッチです。フラットルールで勝ち抜いた強者対、誰よりもルールを熟知していて本人もバトルが強い事で有名な博士！この戦い、どちらが勝つのかお楽しみ下さい！」

「モアナさん！この大会は楽しかったかい？」

「はい！とっても楽しかったです！」

「それは良かった。俺のルールで楽しんでくれてありがとう！でも、だからと言って勝ちを譲るつもりは無いから全力で来い！」
「私も負けるつもりはありませんから！」
「それではバトルスタート！まずはポケモンの選出からだ。」
　見せ合い６３では相手のパーティーを見て選出を決める。モアナのパーティーはギャラドス、パルシェン、ニドクイン、ニドキング、カビゴン、エーフィ。
　対してこちらはガチャからでた卵から孵ったスコルピを進化させたドラピオン、テッカグヤ、シャンデラ、ライボルト、ナマコブシ、カプ・ブルルだ。モアナがびっくりするのも仕方ないだろう。自分の地方の守り神やウルトラホールからの来訪者がいるのだから。これには色々あったのだが、それはまた今度話そう。
　さて、こちらの選出としてはドラピオンは確定しているので他２体を考えるだけでいい。せっかくガチャで産まれたポケモンがいるのだ、出さなければいけないだろう。ドラピオンを先頭に、カプ・ブルルとライボルトを選出する事にした。
「お互いに選出が決まった様なので１体目を出して下さい。」
「いけ！ドラピオン！」
「お願い！エーフィ！」
　対面は悪くない。エーフィがアタッカーならメインウェポンが通らないし、壁張り役

でもこちらには秘策がある。
「エーフィ、リフレクター。」
「ドラピオン、いくぞ！Ｚつぼをつく！」
　これこそこちらの策、Ｚつぼをつくだ。つぼをつく本来の効果に加え、Ｚの効果で急所率が２段階上昇する。これに、急所に当たりやすい技を使う事で確定急所という裏ワザが完成する。しかも、ドラピオンの特性はスナイパーで、他のポケモンよりも急所の時の与えるダメージが大きくなるのだ。急所に当たれば不利な能力変化や壁を無視できる。ちなみに、今回はつぼをつくで命中率が上がったみたいだ。
「…エーフィ、あくび！」
「つじぎり！倒せ！」
　やられた。流石は優勝しただけある。分からないなりにこちらに行動を妨害しにきた。だが、確定急所と一致抜群には耐えられなかった様でエーフィは倒せた。
「次、お願いニドクイン！」
「ドラピオン、すまん、はたきおとす！」
「っ！耐えた！ニドクイン、だいちのちから！」
　あくびが入ったドラピオンに行動させると眠ってしまい、実質戦闘不能となるが能力上昇は消えてしまうし火力の高いニドクインに１ターン好きな行動をさせてしまう。

だからここははたきおとすで持ち物だけでも失わせるつもりだったが、ニドクインの命の玉を落とすだけでなく意地で急所に当て、体力をギリギリまで削ってくれた。
「ライボルト、メガ進化してめざめるパワー！」
　体力がギリギリのニドクインはメガライボルトのめざ氷で倒れる。さて、ラスト1体は誰だろうか。ニドキングは無いだろう。
「頼んだよ！ギャラドス！」
　ラストは色違いの赤いギャラドス。多分メガ枠だろう。さて、相手はどうくるか…定石通りりゅうのまいから来るか。でもライボルトの１０万ボルトが辛いだろう。1発は耐えても2発は受けきれない筈だ。ならば抜群なじしんを打って来るか。なら！
「ライボルト、ボルトチェンジで交代だ。任せた！カプ・ブルル！」
「ラッキー！ギャラドス、メガ進化してりゅうのまい！」
　しまった！メガ進化したギャラドスの体力を半分削れたのはいいがりゅうのまいを積ませてしまった。1舞氷の牙は多分なんとか耐えるだろうからウッドハンマーで倒せるか。
「ギャラドス！こおりのきば！」
「急所⁉…すまない、カプ・ブルル。休んでくれ。」
「さあこれでどちらもラスト1体！次で決着が着くでしょう！」

「「ライボルト(ギャラドス)!!10万ボルト(たきのぼり)!!」」

「長かった壮絶なバトルの勝者が今!決まりました!最後に立っていたのは……ライボルト!勝者、ハルトォォォ!」

「いいバトルをありがとうモアナさん。最後のたきのぼりがライボルトに当たっていれば負けていたのは俺だっただろう。君も、君のポケモンも強かったからヒヤヒヤしたよ。」

「こちらこそありがとうございました!いえ、博士こそアローラのポケモンを使っていたりZ技まで使いこなしていたり…私びっくりしました!」

「素晴らしいバトルを見せてくれた二人に拍手を!」

割れんばかりの拍手が俺達に浴びせられる。楽しんでくれたのならさいわ…ん?あそこ、急に拍手が止んだな…何かあったのか?

「ん?んん!!これはまさか!ボスポケモンが来たぞぉぉ!」

観客席がさっきとは違う興奮に包まれる。一体何が起きてるんだ…え?本当に何?

「ハルト、あれはコロシアム名物のボスポケモン乱入なんだが…相手をして貰えないか?」

「店長……分かった!受けて立とう!」

「なんとボスポケモンの一角、バクフーンとハルト博士の勝負が急遽始まろうとしています！ならばルール説明を！バトルは1体1で、持ち物以外の道具は使用禁止だ！」
「ボスはみんな俺が孵化させているから強いぞ。俺はトレーナーじゃないからバトルはポケモンに任せているが、これまでも相手を倒しまくってるんだ。簡単に勝てると思うなよ。」
「なら俺も相棒を出さないとな。やるぞ！サザンドラ！」
「ハルト博士の代名詞、サザンドラ対、葬ったトレーナーは数知れず、ボスのバクフーンだ！」
　サザンドラはこだわりスカーフを持っている。だから相手もスカーフか積んだ相手以外には基本負けないが、…多分あのバクフーンが首に巻いてるのってスカーフだよなぁ…メインウェポン半減ならいけるか？
「バクフーンのきあいだまだ！」
「っ！避けろ！…ダメか、お返しにだいちのちからだ！」
　1発で体力が相当持って行かれた。サザンドラの体力はもう2割程しか残っていない。対して相手は半分は削れたから後1発当てれば倒せるだろうが…これ絶対努力値おかしいだろ…
「言い忘れてたが、俺のポケモン達は例の努力値を計算したらステータス全部２５２

だったんだぞ。」

「うっそ何そのチート笑えない。」

羨まし過ぎるな…そのチート俺も欲しかった…

「後、個体値ってのも6V固定っぽい」

あ、ならめざパが悪しかないからいいでーす。

「それはさて置き、次のきあいだまを当てられるとマズイ。全力で避けてだいちのちからだ!サザンドラ!」

バクフーンの気合い玉が放たれる。サザンドラが避ける為に横に移動するが読んでいたかの様に追尾してくる。避けろ避けろ避けろ避けろっ…避けた!

「バクフーンのきあいだまを避けたサザンドラ!そしてカウンターのだいちのちからを当てる!……しかしまだバクフーンは立っています!これはサザンドラ絶対ぜつめ…ん?」

バクフーンは立ったままひんし状態になっていた。決して地に膝を着かないという強固な意思で、倒れる事や本能で縮む事を拒んだのだろう。その『強さ』がボスポケモンたる所以なのかも知れない。ステータスや弱点を的確(相棒)に突く思考、その強い意思を持って純粋なタイプ相性だけなら不利な筈のサザンドラを圧倒していた。素晴らしいポケモンだ。彼には敬意を表しておこう。

「今回はありがとう。大会も盛況だったし、フラットルールの採用も考えてみよう。」
「こちらこそありがとう。ポケパークは楽しかったよ。」
「そう言って貰えると助かる。それじゃあ、またな。」
「あぁ、またその内シロナも連れて来るよ。」
「その時はマルマインでも用意しとくぜ！」
　そんなやりとりがあった後、ポケパークから自宅に帰ったる為に船に乗る。大会は、バトルが終わった後、バクフーンを回復させると去って行ったから予定通りに閉会式を行い、大盛況で終わった。店長もチケット代で沢山稼げたと嬉しそうだったのが印象的だ。
　さて、帰ってシロナに今回の事を報告しよう。きっと自分も行きたいと言う筈だ。次行く時は特性がしめりけのポケモンも忘れない様にしよう。